

東村における高等学校生徒の通学圏

田 上 顯

I はじめに

地域住民である中学生が高校教育を受けようとする場合、各個人に適した高校の選択をする。進学校が最終的に決定するまでには種々の条件がからみ合い複雑である。しかし、そうした選択には一定の秩序があり、地域的な差異も生じると予想される。そこで本稿は、ある特定の地域に居住する中学生が高校へ進学する行動を空間的な観点から考察する研究の一環として、茨城県東村における中学生の高校への進学について調査した結果である。

すなわち東村に住む住民がいかにかに高校を選択するか、またその選択行動によって形成される空間組織、換言すれば通学圏の構造がいかにかに成り立っているかを考察するのが本研究の目的である。

研究方法としては、住民・教育委員会・村立中学校教諭・生徒との聞き取り調査をはじめ、中学校、教育委員会等の進路状況一覧や、進学資料の分析を行なった。なお経年変化をみるために1960～80年度までの20年間を考察した。従来、諸地域にみられる人間集団の移動に関しては、都市住民あるいは都市周辺農村住民の日常生活における通勤・通学・買物などの行動を扱ったものが多い。本稿では、従来、

第1表 東村在住生徒者の佐原高校・佐原女子高校への進学者数

年度	1960	1965	1970	1975	1980
中学校					
東村立東	46 (62)	35 (23)	28 (19)	25 (16)	22 (29)
東村立西	13 (41)	8 (13)	10 (13)	16 (25)	7 (14)

()は% 資料：東村教育委員会

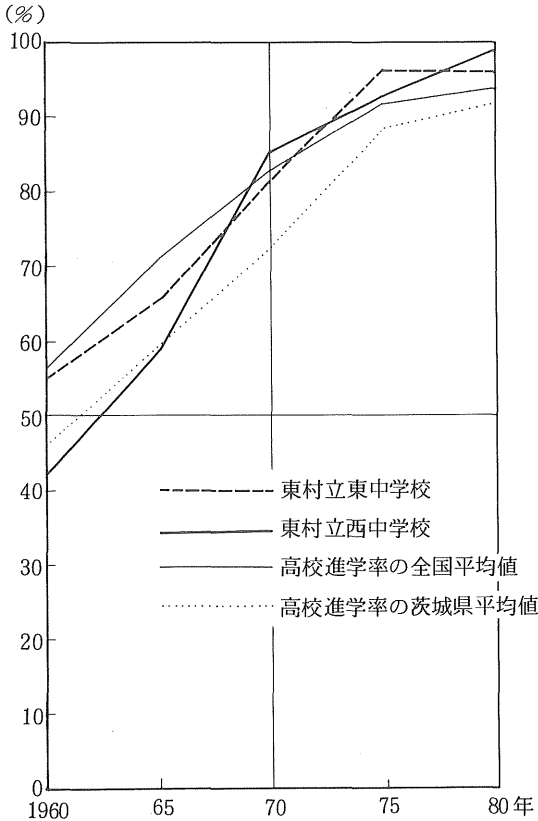
十分になされてこなかった教育を受けるという行動の結果生じる農村の通学圏の分析に焦点を合わせる。

調査地域の茨城県東村は県の東南端に位置し、利根川や霞ヶ浦に面した水田地帯¹⁾である。また、利根川と横利根川を境に千葉県佐原市と神崎町に接する。こうした地域性を反映して、以前からこの地方の中核都市佐原市の影響を強く受けてきた。高校への進学に際しても例外でなく、1960年以前においては、旧制佐原中学校の伝統を継ぐ佐原高校と、旧制佐原高等女学校の佐原女子高校への指向は圧倒的に強く、その傾向は今日までも継続している。

II 東村における高校進学率の推移

通学圏を成り立たせる基盤の一つに、交通機関網、すなわち近接性と通学に要する体力の消耗度である生理的限界がある。茨城県南東部の県境地域は、鉄道網の空隙地帯であり、公共交通機関は路線バスが主体である。東村の中央部をほぼ東西に走る国道125号線と、村の東端を南北に走る国道51号線が大動脈である。その他には、千葉県神崎町や下総町、そして竜ヶ崎市への地方道も整備された結果、1970年代以降は道路交通が整備された。このため、人や物資の交流が容易になり、本村の通学圏も距離的に拡大する条件が整いつつある。

1960年度の村内二つの中学校の高校進学率をみると、東中学校が58%に対し、西中学校は全国平均値や茨城県平均値を大きく下回り40%をやっと超えた程度であり、狭い村内においても地域差がみられる。その主な要因は地域的な経済力の差と、高校に対する近接性に求められよう。1965年代に入る



第1図 東村における高校進学率の推移
資料：東村教育委員会，日本教育年鑑

と本村も高度経済成長の影響を受け，地域住民の生活や意識に変化が生じ始めた。

本村の高校への進学状況は，かつては全国平均値はもちろんのこと茨城県平均値をも下回っていた。しかし，1970年以降，進学率が全国と茨城県の平均値を超えるに至った。他方，農業をとりまく環境も大きく変化した。これまでは水田の経営規模も大きく，安定した農家経済を保持することが可能であったが，稲作生産調整政策決定後その影響をうけ，後継者の就農意欲に低下がみられた。さらに周辺地域での開発に伴う他産業への就業機会が増加し，高校卒業程度の資格と教養が求められたために，高校教育に対する関心が高まった。

また進学率を高める他の原因の一つに，東村と同

じ通学区で隣接する江戸崎町に，1970年度に普通科で共学の江戸崎西高校が新設されたことがあげられる。以後，東村の進学者のうち江戸崎西校への進学率は開校時から現在まで20%から30%を示して，村内中学校からの進学先としては第1位か，第2位の地位にある。東中学校にくらべて至近距離にある西中学校においてはさらに高く，30%を超える進学率である。

III 通学圏の経年的変化

東村には東中学校と西中学校があり，東中学校の生徒数は西中学校のそれのおおよそ倍である。東中学校への進学区域は村の東半分で水田地帯が広く，佐原市をはじめ牛堀町・麻生町・潮来町に近接する地域である。国道125号線で水郷大橋を渡れば佐原市へ通じており，また国道51号線で北利根橋を渡れば牛堀町や麻生町・潮来町・鹿島町へ行くことができ，バス路線もかなり発達している。西中学校への通学区域は，村の西半分で，南側には水田地帯が広がり，北側は台地で畑地や山林が広い。江戸崎町・桜川村・新利根村・河内村や，千葉県神崎町に隣接した地域で，国道125号線や地方道によって土浦市や竜ヶ崎市方面へ通じており，また神崎橋を渡れば南の千葉県側に行くこともできる。

III-1 1960年の通学圏

交通機関や道路網が未整備の状態にあった1960年の進路状況をみると，村全体の高校進学率は50%で，就職及び在家庭が49%であった。その主な進学先は佐原市と江戸崎町であり，その数は進学者の90%を占めていた。進学先の内訳をみると，普通科や家政科を希望する者の多くは佐原市内の伝統校へ，農業科を希望する者は，江戸崎町内の農業校へと進んだ。また少数ではあるが，潮来町や麻生町，そして下総町や遠く千葉市への進学者もみられた。

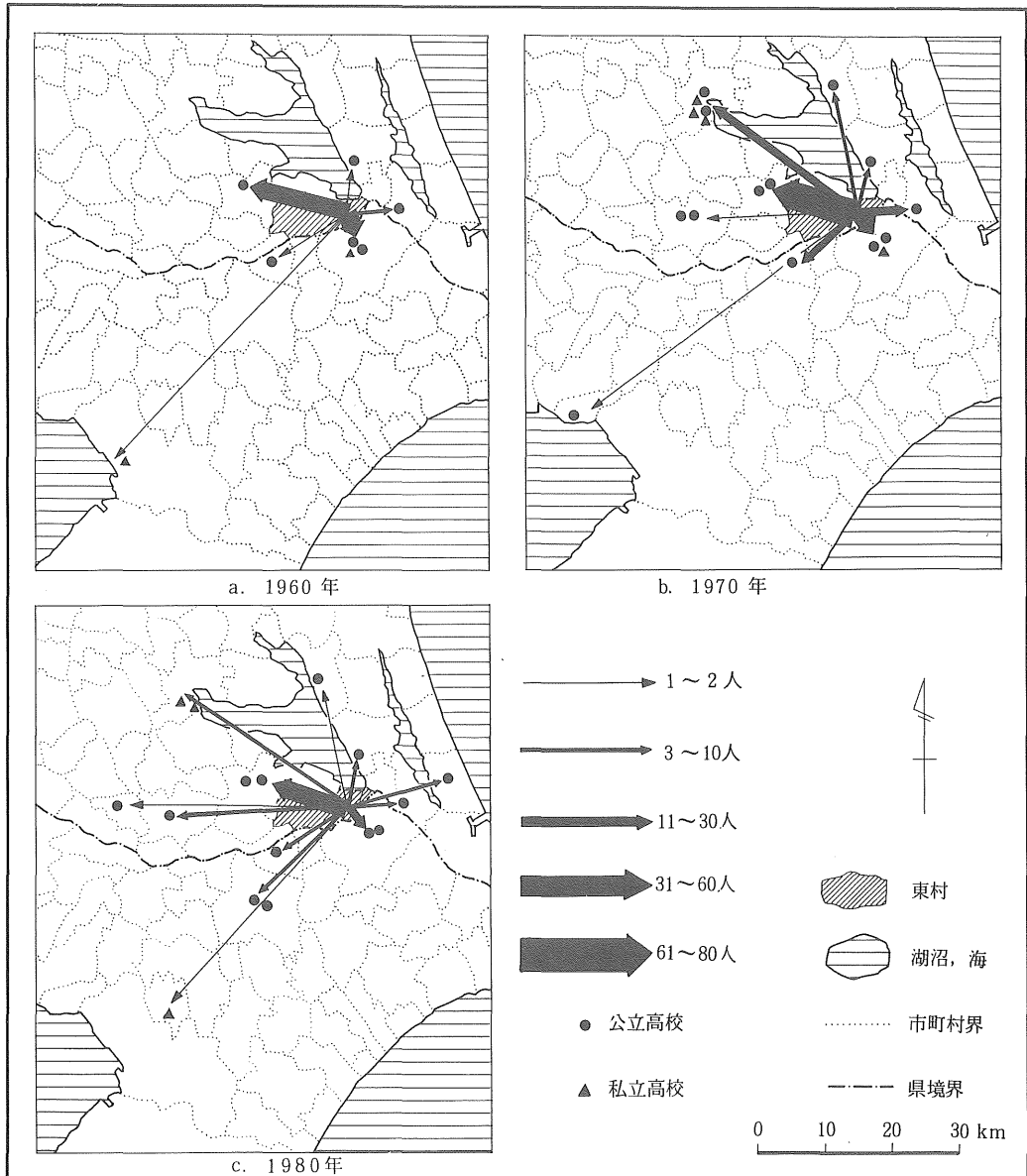
以上のように，この時期における通学圏は通学至便な近隣地域をおおっており，特に佐原市や江戸崎町方向に展開していた。

III-2 1970年の通学圏

当期になると進学率が急激に上昇して，茨城県平均値をうわまわり，全国平均値とほぼ等しくなった。

そして通学圏も大幅に拡大した。通学圏が拡大した地域は、第4通学区の玉造町や、第5通学区の土浦市、そして同一通学区である第6通学区²⁾の竜ヶ崎市などである。また、特殊な例ではあるが習志野市への進学者もみられた。こうした通学圏の拡大がみ

られた反面、佐原市への進学者は大幅に減少して、その地位を江戸崎町にうばわれた。江戸崎町への進学者が急増した主な要因は、人気の高い普通科を持つ江戸崎西高校が新設されたことによると考えられる。



第2図 東村における通学圏の変容
 資料：東村立東中学校，西中学校進路調査

一方こうした動向とは対照的に、農業科の江戸崎高校への進学者は漸減した。またその他の隣接地域への通学者は、増加する傾向があった。土浦市への進学者は30名であったが、そのほとんどが私立高校への進学であり、このことは特徴的な現象であった。

私立高校への進学者が多くなったのは、1965年前後からである。これは、公立高校が進学率の上昇に伴う進学者の増加に対応出来なかったことによる。また、生徒を進学させる家庭のなかで公立高校にくらべて教育費の高い私立でも経済的に負担が可能になるものが増大した。さらに、大学進学までを考慮して、私立大学の付属高校に進学する希望が増える、などの理由によるものと考えられる。

III-3 1980年の通学圏

この時期は、周辺地域の開発に伴う効果として、道路網や交通機関が整備された。そのため、これまで以上に通学圏が拡大した。北西方向への通学圏の範囲には変化がなかったが、通学者数は減少した。なかでも土浦市への通学者は、1970年の30名から5名へと、大幅に減少した。しかし、西方向への通学圏は拡大し、竜ヶ崎市域を超えて藤代町にまで及んだ。また、通学圏は南や東方向でも拡大しており、これは通学圏が成田市や、四街道市、そして鹿島町など各地域へ分散する傾向がみられた。

一方、これまで多くの進学者を集めた佐原市や江戸崎町・潮来町、そして下総町へは、通学者のかなりの減少がみられた。このように通学者が広い範囲に分散する傾向は、東村が県境に位置するといった

地域性も無視できない。そして東村をとりまく周辺地域の開発に伴う交通機関の発達や、道路網の拡充に基づいて通学の基盤が整備されたことも、通学圏を拡大させる要因として作用した。他方、進学者は高校を選択するあたりに、それぞれの多様な価値感を満足させるために、ある者は遠距離をいとわず進学するようになった。

IV むすびにかえて

以上に述べたように、本研究の対象地域である東村は、茨城県の公立学校通学区の境界に位置し、また、県境にも近いという特殊性をもつ地域である。さらに、都市圏が複雑に錯綜する地帯であるため、高校進学に対する行動には多様性がみられた。

東村における通学圏の変容(1960~80年)は、佐原市や江戸崎町を中心にした隣接地域の狭い範囲に収束していたが、しだいに広域化していった。広域化の外的要因としては、周辺地域の開発や、開発に伴う交通機関の発達、さらに道路網の拡充整備などによる通学基盤の整備があげられよう。また、内的要因としては、周辺地域の開発の影響を受けて地域住民の価値感が多様化して、公立・私立を問わず数多くの高校を選択するようになったからである。したがって、通学という行動の特殊性のために、通学圏と都市圏とは合致しないのが一般的であろう。

今後は、適正な通学圏の確立を目指すべきであろう。

本稿を作成するにあたり、筑波大学の山本正三・高橋伸夫両先生をはじめ、同大学地球科学系の諸先生方ならびに大学院生伊藤悟氏には御指導と御鞭撻をいただきましたことを深く感謝いたします。また、資料を提供していただきました東村教育委員会ならびに、東村立西中学校社会科の飯嶋 栄先生・東村立東中学校の先生方、また、現地調査に際して聞き取りに応じて下さった住民の方々に感謝の意を表わします。

〔注〕

- 1) 耕地面積 346,480 a のうち、水田面積は 334,113 a で、水田率は 96.4% である。総人口は、1981年の村統計によると 13,260 である。そのうち、農業就業人口は 5,097 である。
- 2) 茨城県の公立高校には、公立学校の通学区が設定されており、全県が 8 学区に分けられている。調査対象地域の東村は、第 6 学区内にある。1981 年現在、第 6 学区内で高校を有する市町村は、竜ヶ崎市・取手市・江戸崎町（それぞれ 2 校ずつ存在する）、藤代町・牛久町（それぞれ 1 校存在

する)である。

〔参考文献〕

- 高野史男 (1978) : 経済圏—商圈調査を中心として—, 「人文地理調査法」朝倉書店, 159~160.
- 高橋伸夫, 南榮佑 (1981) : 住民の医療行動に関する分析—茨城県出島村の事例—, 東北地理第 33 巻第 1 号, 35~41.
- 繁樹義一 (1981) : 土浦市における医療圏の構造, 新地理第 29 巻第 3 号, 10~22.
- 高橋伸夫・南榮佑・奥井正俊・浅見良露・高橋重雄 (1979) : 霞ヶ浦東部湖岸地域における住民の生活行動圏, 霞ヶ浦地域研究報告第 1 号, 93~130.
- 茨城県統計課・茨城県統計協会編集 (1979) : 茨城県勢要覧, P. 12.
- 全国高等学校長協会編 (1981) : 全国高等学校一覧, 63~70, 96~106.